

北海道熊研究会」 Hokkaido Bear Research Association

ご意見ご連絡は本紙送信 email ではなく、下記の email へお願い致

します

e-mail: kadosaki@pop21.odn.ne.jp

＜北海道熊研究会 会報＞ 第92号 2019年8月23日

北海道熊研究会事務局 北海道野生動物研究所内(Tel. 011-892-1057)

代表 門崎 允昭

事務局長 Peter Nichols ピーターニコルス氏

幹事長 藤田 弘志 氏

既報会報の1～91号はWebsiteに「北海道野生動物研究所」と入力しご覧下さい

「北海道熊研究会」 Hokkaido Bear Research Association の活動目的

熊の実像について調査研究し、熊による人畜及びその他経済的被害を予防しつつ、人と熊が棲み分けた状態で共存を図り、狩猟以外では熊を殺さない社会の形成を図るための提言と啓発活動を行う。この考えの根底は、この大地は総ての生き物の共有物であり、生物間での食物連鎖の宿命と疾病原因生物以外については、この地球上に生を受けたものは生有る限りお互いの存在を容認しようと言う生物倫理(生物の一員として人が為すべき正しき道)に基づく理念による。

北海道日高山系の十勝管内、札内川上流の八の沢源流上にある「カ

ムイェクワカシ頂上東側の圏谷カール」での熊による人身事故の顛末。この山頂(1979m)は日高山系第2の高峰で(一番は日高幌尻 5052m)、50 km間隔で3カ所ある一等三角点の2つ目がある。私は(門崎)幾度も四季通じて登っており、2月にスキーとアイゼンで、八の沢から頂上に直登した事もある場所。熟知である。今回、熊に襲われた登山者2人も、この八の沢から登山したもの。

帯広市にある、「十勝毎日新聞社」からコメントを求められ、応じた記事が、掲載され、送られて来たので、それをここに転載するので、お読み戴きたい。

この記事にある被害者の状況説明の文章と識者と言う3名の言い分を吟味されたい。

私の見解：襲った個体は同じである。本気で襲っていない。個体は3歳代で襲った時刻がいずれも午前4時代である。反撃されてその個体は、直ぐに、人から離れ、逃げている。

ホイッスルを鳴らしていたら、襲われなかった事故である。

熊が居る可能性がある場所には、ホイッスル(軽い、音が響きわたる)と鉈は必需品で有る事を肝に銘じることである。この熊を殺すべきと言う者は、熊の生態に関する己の無知と自然に対する傲慢さを恥よと言いたい。真摯に、熊や自然と向き合う事だ。そして発言せよ。

クマまた人襲う危険

【中札内】「人の存在を気付かせることが大切」行政は登山者に徹底的な周知を。7月中旬以降、中札内村のカムイクウチカウシ山（1979）で2人の登山者を襲ったクマは、自ら人に突進して襲ったとされる。その後も登山者が絶えない中、クマの専門家は事故をどう見るのか。

(高田亮太郎)



登山口に最寄りの札内川ヒュッテ駐車場。登山客や釣り人らの車が約20台止まっていた(8月13日午後2時ごろ)

カムエク山2人襲撃で専門家意見

<事故の状況>

7月11日＝神戸市の男性(65)
クマは体長約1.5m。午前4時40分ごろ、単独で登山中に約20分先でクマと遭遇した。突進してきたので、ついで抵抗し、かわそうとした際に右前腕に長さ10cmほどの傷を負った。さらに襲いかかろうとしたが、笛を吹くと立ち去っていった。自力で下山し、中札内村の診療所で治療を受けた。登山歴45年。

(帯広署などより)

7月29日＝札幌市の男性(47)
クマは体長約1.2～1.3m。午前4時ごろ、単独で登山中に、約10分先からクマのろなり声が聞こえた。突進してきたので、小さなリュックで払いのけようとしたが、背中側に回り込まれ、かみつかれた。倒されて馬乗りになされ、足で蹴ったところ下山方向に逃げていった。携帯電話で110番通報し、ドクターヘリで札幌市内の病院に搬送された。頭などを50針縫う治療を受け、8月11日に退院した。登山中、クマよけ鈴はリュックに付けていたが、ホイッスルは未携帯だった。登山歴3～4年。

(帯広署と男性の母親より)

徹底的に事故周知して

◆帯広畜産大学の柳川久副学長(野生動物管理学)
クマは普通、人を見たら逃げ、人を襲う個体は普通ではない。(山への)人の出入りを抑えられるなら、周知が必要だ。行政は登山の必要はない。だが、口などで、事故が起きた時、振る舞いから考えると、同入山を禁止できる法的根拠

登山者に対策指導

はなく、実際に登山者がいる以上、襲われた2人と同じ状況になればまた襲う可能性がある。本来なら駆除すべきだが、同一のクマを見つけたら駆除するのは、活動し始めた時間帯に、事実上、不可能だろう。人が近づいてきたから、興奮して排除しようとしたの

人の存在知らせて

◆ヒクマの人身事故を50年間検証してきた北海道野生動物研究所の門崎允昭所長(帯広出身)

クマに本気で襲われたら殺されている。今回のクマは、活動し始めた時間帯に、人が近づいてきたから、興奮して排除しようとしたの

入山規制か駆除か

◆知床財団(オホーツク管内斜里町)ヒクマ対策グループの葛西真輔さん

まずは、人を襲ったクマが今も同じ場所にいるのか、居着いているなら、その理由を調査する必要がある。2人を襲ったクマが同一個体なのか確認するため、DNA型鑑定も必要だ。だが、山でクマの事故が起きてても、対応できる体制が整っていない。大切なのは事故の再発を防ぐこと。方法は二つしかない。登らな

いかに、クマを駆除するか。実際に入山を規制できない以上、人を襲ったクマは駆除するべきだと思う。

などを詳しく登山者に指導するべきだ。

の駆除には反対。人の存在を気付かせれば、襲ってくることがほまずない。登山中、ホイッスルを時々鳴らし、万が一、近づいてきたら大声で脅す。それでも近づいてきたら、ナタか大きな石で攻撃する。クマは「痛い」と思ったら100%逃げていく。